

“偽”をあばく

日本漢字能力検定協会は昨年を象徴する漢字に“偽”を選んだ。年金記録，政治活動費，薬害などをめぐる政治家や官僚の嘘疑，耐震強度の偽装，玩具などへの有害物質の使用など巷の話題となったが，“偽”の選定されたのは食品偽装事件が相次いだことによるようだ。特に，鶏肉や挽肉，土産，ファーストフード，洋菓子メーカー，老舗料亭など食品をめぐる素材，産地，賞味期限の偽装など，次から次へと発覚する食品偽装に，食品表示に対する国民の信頼感も薄れつつある。食品は日々の生活に密着しているだけに，国民は大きな関心を持ってこの推移を見守っている。

このような状況を，分析化学にとって一つのチャンスと捉え，良い意味での分析化学の大衆化を図るべきと考える。安全で安心な社会の維持に分析化学（科学）は技術的な側面から大きく貢献している。DNA検査等の先端技術を用いれば，加工された食品に使われた材料が分かり，産地もある程度特定できる。最新機器を使用すれば食品や日用品に含まれるに含まれる微量の有害物質を検出できる，実に分析化学は生活に密着しているのであるが，“分析化学”が国民の間で認知されているとはどうも思えない。ここ数年の間に，“万能細胞”，“バイオエタノール”，“燃料電池”，“光通信”など，10年前には国民に知られていなかった技術が人々の日常の会話に登場するようになってきている。「これらが国民の身の回りにある最終製品や医療に関わるものであり注目されやすく，分析化学はその基盤を支えている」と言うことができるが，いつまでも縁の下の力持ちでいいのだろうか。食品偽装の問題は，分析化学の重要性を国民に広くアピールできるチャンスであり，これにより分析化学を志向する若者も増えるのではないだろうか。

分析化学の会員数は減少傾向であるというが，分析化学に関わる研究者も減少しているのだろうか。私は2年前から日本学術振興会の研究員（プログラムオフィサー）を兼務している関係で，過去の科件費採択状況を調べてみた。1996年には工業分析化学と分離・精製・検出法の細目で86件が新規採択されている。これに対して，2006年では分析化学細目（2003年に細目に変更された）で新規採択は77件と減少している。科件費全体で見ると新規採択件数は1996年で23,000，2006年は24,000件であることからみると，分析化学は一見地位が低下しているように見える。しかし，実際はそうではない。私が担当している複合新領域のナノ・マイクロ科学分科には，化学以外に物理，電気，情報，材料，バイオなど種々の領域から申請されるが，その内容をみると分析化学（科学）に関わる応募が極めて多い。これは，他の理系分科でも一般的に見られる現象であると思う。申請書を見ているときらきら輝くような発想をしている若手も多く，潜在的な分析化学会員は極めて多いと推定する。これらの研究者をどのように引きつけたらいいだろうか。私は明確な解答を持ち合わせていないが，異分野から分析化学に参入した私が望むことは，良い伝統は尊重しつつも権威主義的な部分を廃し，異分野から参入した有能な若手が居心地が良いと感じる環境作りをして欲しいということである。